
両大戦間期のウクライナ西部の町リヴィウ

——ハプスブルク時代の痕跡をたどったルート『ガリツィアへの旅』——

麻生 陽子

1. テラ・インコグニタのウクライナ

2022年2月24日に始まったプーチン政権のウクライナ侵攻によって、人、都市、文化財が物理的に破壊されている¹⁾。戦争は収束見えぬまま長期化し、犠牲者は増えつづけている。ロシア軍の無差別攻撃によって死傷し、生活を破壊されたウクライナ語を話すウクライナ系住民にたいしては同情がむけられる一方、ロシア語を話すウクライナ系住民をはじめ、ロシア系住民、加害者であるロシア語話者も死傷している事実は忘れられがちである²⁾。

ソ連解体の結果生まれたウクライナには、ウクライナ語を話すウクライナ系住民だけでなく、ロシア系住民のほかクリミア・タタール人、ロシア語を話すウクライナ系住民も多数暮らしている。おもにウクライナ語とロシア語の二言語が使われるこの国にあって、使用言語によって人の帰属やアイデンティティを判断することは短絡的である³⁾。民族と言語が一致しない、複数

1) ウクライナの首都「キーウの聖ソフィア大聖堂と関連する修道院群及びキーウ・ベチェルシク大修道院およびリヴィウの歴史地区群」は、2023年の第45回世界遺産委員会で危機にさらされている世界遺産（危機遺産）リストに記載された。[<https://whc.unesco.org/en/news/2608>]（2023年11月19日掲載確認）

2) 中村唯史「実体化する境界『ロシアーウクライナ』の二項対立の図式をめぐって」：『現代思想 ウクライナから問う 歴史・政治・文化』青土社 2022年、60-66頁所収、61頁参照。

3) 加藤有子「ウクライナ文化の危機の本質 侵攻の口実にされた『文化』と時代錯誤の

言語を話す住民の帰属にかんする知識あるいは想像力の欠如は、当たり前のように実体化しているロシア対ウクライナという二項対立をさらに助長し、複雑な現実を捉え損なう恐れがある。

現在ウクライナは、「ユーロとアジアのぶつかる『接触の圏域』へと強制的に作り変えられている」⁴⁾。ウクライナは、モンゴル人やタタール人などの民族と民族が交錯し、ヨーロッパとアジアが接する境界地域に位置する。境界地域において、人の帰属やアイデンティティは重層的で曖昧である。近代以降、民族カテゴリーに組み込まれることなく複数の言語を話したユダヤ人をはじめ、民族と民族の間で生きた住民にたいし、明確な帰属が要請されるようになった。しかし言語や民族、宗教が混在し、それらを分かť境界も曖昧な地域にたいし、領土と民族の居住領域、言語の使用範囲の一致を求める国民国家的な西欧近代の価値観をあてはめること自体には限界がある。なかでも文学の領域では民族と言語と地域の錯綜が常態であることもまた、忘れられがちである。

東欧地域の研究で知られるオーストリアの作家で翻訳家のマルティン・ポラック（1944-）は、ロシアによるウクライナ侵攻後に行われた新チューリヒ紙のインタビューで、西欧における東欧にかんする知識の欠如に言及している⁵⁾。現代のオーストリア人にあつて、ウクライナの地理的・言語的現状を詳しく知る者は少ないという。オーストリア自体、第一次世界大戦前まで

植民地主義」：同掲書、89-96頁所収、91頁参照。

- 4) 福島亮太「ユーラシアの臨界点 ウクライナ危機に寄せて」：同掲書、254-261頁所収、261頁。
- 5) Martin Pollack: «Da frage ich mich schon, wo diese Leute leben. Man hat keine Ahnung von der Geschichte der Ukraine». [<https://magazin.nzz.ch/empfehlungen/martin-pollack-erklart-wieso-uns-vergangene-gewalt-etwas-angeht-ld.1683320?reduced=true>] (Stand vom 22.5.2022) ドイツ語圏では大部分のウクライナ語の文学が知られていないことについては、以下を参照。Vgl. Martin Pollack: Galizien, das ist ein fernes, fremdes Land. In: Jacek Purchla/Wolfgang Kos/Žanna Komar/Monika Rydiger/Werner Michael Schwarz (Hg.): Mythos Galizien. Wien/Kraków. 2015, S. 191-195, hier S. 194f.

の約 150 年間帝政ロシアの隣国であっただけでなく、ウクライナ西部がかつてオーストリア・ハプスブルク帝国の周縁をなすガリツィアとして帰属した過去はなにかば忘却されている。ウクライナは相変わらずテラ・インコグニタのままなのである。

ポラックは自身のガリツィア論のなかで、チェコスロヴァキア（現在のチェコ）のブルノ出身の作家ミラン・クンデラ（1929-2023）の「中央ヨーロッパ」論との類似についても言及している⁶⁾。ポラックの先駆的著書『ガリツィアへ 東ガリツィアとブコヴィナ地方の消滅した世界への想像上の旅 *Nach Galizien. Eine imaginäre Reise durch die verschwundene Welt Ostgaliziens und der Bukowina*』が発表された前年、クンデラの論文『誘拐された西欧——が中央ヨーロッパの悲劇 *Un occident kidnappé ou la tragédie de l'Europe centrale*』（1984）は亡命先フランスで発表された⁷⁾。興味深いことに、両テキストはほぼ同時期に発表されたばかりではない。ポラックが関心を寄せたハプスブルク帝国領ガリツィアも、中央ヨーロッパが 1945 年以後に度重なる悲劇を経験した中央ヨーロッパと同様の運命をたどっていたのである⁸⁾。

中央ヨーロッパの運命を先取りしたかのようなオーストリア領ガリツィアにたいして西欧がむけたまなざし⁹⁾、さらには、共産主義国家ソ連による中央ヨーロッパへの攻撃のさいにむけられたまなざし、この両者に共通して見出されるのは西欧社会の無関心である。クンデラも、西欧の読者が、中央ヨーロッパの「諸国が西欧の地図から消えてしまったことを忘れてい」と訴えている¹⁰⁾。クンデラの嘆きは、西欧社会の『「中欧」への無関心、ひいては、

6) Ebd., S. 195.

7) ミラン・クンデラ「誘拐された西欧 あるいは中央ヨーロッパの悲劇」(里見達郎訳)『ユリイカ 詩と詩論』1991 年、62-79 頁所収。フランス語版発表の翌年にドイツ語版が発表された。

8) Vgl. Pollack, S. 195.

9) Ebd.

10) クンデラ、68 頁。

中欧の体現する文化的な価値への無関心に対する絶望感¹¹⁾にほかならない。昨今のロシアの軍事侵攻にさいしてポラックも、ウクライナにかんする西欧側の知識の欠如という無関心を指摘していた。「ヨーロッパの縮図、その変化に富んだ豊かさの縮図」、「いわば原ヨーロッパ的な小ヨーロッパ」とクンデラが呼ぶ中央ヨーロッパの姿は、反西欧にして画一的な「ロシアに対する、唯一可能な防壁」としてのハプスブルク帝国¹²⁾、ひいてはその縮図にひとしがいガリツィアにも見出されるだろう。

本稿では、ポラックおよびクンデラの指摘を補助線としながら、両大戦間期というハプスブルク帝国崩壊後にかつてのガリツィアを描いた、ユダヤ系ドイツ語作家ヨーゼフ・ロート（1894-1939）の紀行文を取り上げる。彼の紀行文で記されているのは、ガリツィアの新たな帰属先となったポーランドの民衆の日常生活だけではない。ナショナリズムが各地で高揚する両大戦間期にあってもなおかろうじて体感される、言語的、民族的、宗教的多様性というハプスブルク時代からの遺産にほかならない。まず、現在のウクライナ西部とハプスブルク時代のガリツィアとの関係性について述べることから始めたい。

2. ウクライナ西部の「小ウィーン」リヴィウ

2.1. ウクライナにおけるハプスブルク・ルネサンス

首都キーウから西に約 500 キロのところに位置するウクライナ西部最大の町リヴィウの外観は、東部のそれと異なる。リヴィウは「小ウィーン (klein-Wien)」という当時の異名に似つかわしく、帝都の町並みを彷彿とさせる建造物が至る所に現存する。1897-98 年にウィーンの建築事務所フェルナー &

11) 安永愛「『ヨーロッパ』という寓話—ミラン・クンデラをめぐって」『Azur』第3号、成城大学フランス語フランス文化研究会 2002年、69-83頁所収、70頁。

12) クンデラ、65-66頁。

ヘルマーによって建設されたカジノで、現在は「科学者の館（Будинок вчених）」として公開されている豪華なネオ・バロック建築をはじめ、ネオ・ルネサンス様式の特徴をもつ国立歌劇場、著名人も数多く宿泊した宮殿のようなホテル・ジョージ（1901年に新装開業）、ウィーン分離派の影響が見られる街中の装飾的な窓枠や階段の手すり、扉のわき柱などの細部に至るまで枚挙にいとまがない。戦火を逃れ、ソ連時代を生き延びた建築遺産は、リヴィウがオーストリア・ハプスブルクと共通の文化圏に属していたことを視覚的に伝えている。

両地域の文化的・歴史的な連続性を示す事例として、ユネスコ無形文化遺産にも登録されたウィーンの「カフェハウス文化（Kaffeehauskultur）」の影響も見逃すことはできない。カフェハウス文化は、かつてオーストリア統治下にあったリヴィウの典型的なイメージである。リヴィウはまた、マゾヒズムという性的倒錯の名称の生みの親として知られるドイツ語作家レオポルト・ザッハー＝マゾッホ（1836-1895）の出身地でもある。彼が幼少を過ごしたこの町には近年、彼の銅像とともに、その名を冠した「カフェ・マゾッホ」も開業し観光スポットとして賑わっている¹³⁾。

1991年のウクライナ独立から9周年を控えた2000年は、オーストリア＝ハンガリー二重帝国の皇帝フランツ・ヨーゼフ一世（1830-1918）の生誕170年の節目にあたるとして、リヴィウでは帝国を偲んで皇帝の偉業をたたえる学術的なイベントが行われただけでなく、皇帝の銅像設置案も検討された。事実、フランツ・ヨーゼフ一世の銅像は、かつてのオーストリア領ブコヴィナ地方の町チェルノヴィッツ（現在のチェルニウツィ）に設置された¹⁴⁾。こうした文化的な取り組みが、ウクライナの独立記念日を前に敢行さ

13) Kim Fraser/Maria Kachmar/Tamara Krawchenko: Awesome Lviv. Interesting things you need to know. Kyiv 2018, S. 16f.

14) Vgl. Roman Dubasevych: Zwischen kulturellem Gedächtnis, Nostalgie und Mythos. Eine Erinnerung an die Habsburgermonarchie in der Ukraine nach dem Zusammenbruch der Sowjetunion. Wien/Köln/Weimar 2017, S. 20.

れた点は偶然ではない。当時の中央集権的な政権にたいして強まる不快感を表明する政治的マニフェストであるという¹⁵⁾。

ウクライナ西部における文化的・政治的な意味合いをもつハプスブルク・ルネサンスは、文学の領域にも認められる。近年、ポーランドの作家ブルーノ・シュルツ（1892-1942）とならんで、ガリツィア地方にゆかりのある作家によるドイツ語文学がウクライナ語に翻訳されている。なかでもフランスで白ロシアのツルゲーネフと呼ばれたザッハー＝マゾッホやヨーゼフ・ロートなどテキストは、ウクライナの文化とオーストリア領ガリツィアをつなぐ重要な橋渡しの役割を担っている¹⁶⁾。

ウクライナ西部のリヴィウは、1900年から2000年までの間、第一次世界大戦後以降、ポーランドやナチスドイツ、ソ連の支配下で蹂躪され、この町の政治的な帰属先は八度も変更された¹⁷⁾。ウクライナは地理的にはヨーロッパ大陸の真ん中に位置するにもかかわらず、ソ連解体によって生まれたウクライナは政治的に東欧として認識されてきた。ウクライナ西部のリヴィウは地理的にキーウよりも西側のポーランドの国境のほうに近いが、ポーランドが2004年に欧州連合に加盟して以降、さらに東欧として捉えられている¹⁸⁾。こうした西欧中心の政治的二項対立の見方を相対化するかのように、近年リヴィウは「西欧にあるもっとも東方の町にして東欧にあるもっとも西方の町」という、東西の両方を包摂する自己規定がなされている¹⁹⁾。西あるいは東の二者択一の見方をしりぞけ、東西の境界地域という、第三の位置付けが表明されていることは注目に値する。

15) Ebd.

16) Alois Woldan: Galizien-Literatur-Texte und Kontexte. In: Purchla/Kos/Komar/Rydiger/Schwarz (Hg.), S. 223-231, hier S. 229.

17) Vgl. Gregor Gatscher-Riedl: Lemberg. k.u.k. Sehnsuchtsort und Weltstadt in Galizien. Berndorf 2020, S. 9.

18) Ebd.

19) Ebd.

独立以降ネーションの基盤が脆弱なウクライナはロシアとの緊張関係にあって、ソ連支配の過去から切り離されたアイデンティティを構築するべく、そのための歴史的根拠が掘り起こされてきた²⁰⁾。ウクライナ西部が中世以降ハールィチ・ヴォルィーニ大公国として長らくヨーロッパに属し、18世紀末以降はガリツィアとしてハプスブルク帝国領下にあった過去、さらにはギリシャ・カトリックという宗教、ドイツ語文学などは、現代のウクライナ西部にとって情緒的のみならず文化的、政治的な重要性をもつ。

戦間期のポーランド支配下およびソ連時代に呼び起こされた古き良きハプスブルク時代への憧憬は、観光客が抱く今日のリヴィウのイメージにも継承されている。しかしドイツ語圏において、ガリツィアはなかば忘却された地域であるばかりか、第二次世界大戦までは否定的に捉えられる地域だった。以下、ガリツィアのイメージの変遷について概観したい。

2.2. 「ガリツィアの悲惨な状態」

現在のポーランド南部およびウクライナ西部には、ガリツィア・ロドメリア王国（以下、ガリツィアと略記）と呼ばれるオーストリア領が存在した。1772年に始まるポーランド分割によってオーストリア領に取り込まれたガリツィアは、ウィーンから見て帝国の北東の周縁に位置していた。ポーランド系をはじめ、ルテニア系（ウクライナ系）、ユダヤ系、ドイツ系、アルメニア系、その他数多くの少数民族が居住していた。サン川を境に西側には、おもにローマ・カトリックのポーランド系住民が居住し、レンベルクを含む東側には、ギリシャ・カトリックのルテニア系住民やユダヤ人が居住していた。特に、ポーランド王国時代から、正統派、ユダヤ啓蒙主義（ハスカラ）、ハシディズムなど、この地方には様々な教派のユダヤ教徒も住んでいたため、ガリツィアは帝国領内でもっともユダヤ人を抱えた地域となる。

20) Purchla/Kos/Komar/Rydziger/Schwarz, S. 267; Marcin Wiatr: Literarischer Reiseführer. Galizien. Unterwegs in Polen und der Ukraine. Potsdam 2022, S. 11.

18世紀末に帝国に組み込まれたガリツィアは、チェコのボヘミアやモラヴィアのようなハプスブルク家と関係のあった伝統的な地域とは異なり、人工的に作られた地域である。啓蒙専制君主ヨーゼフ二世によってオーストリア化が進められていくなか、旅行者をはじめ、この地に赴任した学者や将校らによる紀行文や報告書を通して、帝国の北東をなす周縁地域の実態は明らかにされていった²¹⁾。

19世紀中葉以降に、ガリツィアはこの地域出身の書き手によって描出されていく。プラハに移住後もガリツィアをテーマとし、ことにルテニア系住民や正統派ユダヤ人の生活を好意的に描いたザッハー＝マゾッホや、東ガリツィアの Cholotkiy 出身のユダヤ系ドイツ語作家カール・エーミール・フランツォース (1848-1904) などが挙げられる。フランツォースは1876年、1878年そして1888年に発表された6巻のシリーズ本「文化の絵 (Kulturbilder)」の表題のなかで、ガリツィアを含むヨーロッパとアジアの間の境界地域を、植民地主義的な視点から文明と野蛮が混在する「半アジア (Halb-Asien)」と命名したことで知られる。フランツォースをはじめとするドイツ文化への同化を求めるガリツィア出身のユダヤ系作家によって、この地の因襲的なユダヤ社会は批判的に記述された²²⁾。

帝都ウィーンから隔絶されたガリツィアでは、経済的・工業的發展が遅れ、ガリツィアは原材料の供給地として搾取されつづけた。ガリツィアが19世紀末以降、帝国領内で北南米への移民をもっとも排出した地域となったように²³⁾、行商や手工業など以外で生計を立てることのできなかったユダヤ人や

21) Maria Kłańska: Deutschsprachige Literatur in Galizien. In: Purchla/Kos/Komar/Rydiger/Schwarz (Hg.), S. 233-240, hier S. 233f.

22) Vgl. ebd., S. 235ff.

23) 19世紀後半以降、飢餓や疫病の頻発にもかかわらず、ガリツィアの人口は増大し、1910年頃には約800万人に達した。人口増大による土地不足や食糧難、失業率の高さなどの経済的理由をはじめ、ユダヤ人にとっては宗教的・政治的迫害から逃れるべく、1890年代以降ガリツィアからのユダヤ人や貧しい農民の移民が本格化した。ガリツィアから北米への移民にかんしては、以下を参照。Vgl. Martin Pollack: Kaiser von Amerika.

土地をもたない農民の貧窮は、「ガリツィアの悲惨な状態（das galizische Elend）」と形容されるほど人口に膾炙していた²⁴⁾。西欧中心の啓蒙的とされる視点が捉えてきた、ガリツィアの経済的・文化的な後進性、農民やユダヤ人らの衛生観念の欠如や無知、中央政府組織の横暴という見方は²⁵⁾、この地域の「救貧院」としてのイメージを形成したのである。

ガリツィアは、二度の世界大戦をはじめとする凄惨な血みどろの殺戮や衝突、奪還、突撃によって絶えず荒廃され、この地域の人的・文化的豊穡さは人為的に破壊された²⁶⁾。第二次世界大戦まで否定的なイメージが支配的だったガリツィアはしかし、人的・文化的多様性が失われた結果、のちの世代によって肯定的に捉え直されることになる²⁷⁾。ソ連崩壊後、この地域への通行が可能になると、多民族共生の時代が憧憬の対象として回顧されるようになった²⁸⁾。例えば、失われたユダヤ文化をはじめ、壁にうっすらと残るポーランド語・ドイツ語・イディッシュ語の文字、ゴースト・サインといった過去の痕跡を収集する動きが活発である²⁹⁾。文学の領域では、家族や祖先のルーツをたどるかたちでガリツィアへの想像上あるいは現実の旅が表現されている。近年では学際的研究も盛んであり、2015年にウィーンとクラクフで開

Die große Flucht aus Galizien. München 2015, S. 75ff.

24) Ebd., S. 70; Karl-Markus Gauß/Martin Pollack: Das reiche Land der armen Leute. Literarische Wanderungen durch Galizien. Klagenfurt 2007, S. 17.

25) Ebd., S. 16–18.

26) Ebd., S. 22.

27) Pollack (2015), S. 193f.

28) Gauß/Pollack, S. 23; Wiatr, S. 11. 国民文学の枠組みを超えたテキスト群によって描出されたガリツィアの、虚構と現実が重なり合う空間としての魅力は「ガリツィア神話 (Mythos Galizien)」と呼ばれる。Vgl. Woldan, S. 227; Kłańska, S. 239.

29) 石、記念碑、建造物、墓地などに認められる、多民族混在時代や失われたユダヤ文化の痕跡をたどった写真集の出版が近年相次いでいる。Vgl. Robert Hofrichter/Peter Janoviček: Streifzüge durch Galizien und die Bukowina. Des Doppeladlers wilder Osten und der erste Traum von Europa. Berndorf 2016; Christian Herrmann: In schwindendem Licht. Spuren jüdischen Lebens im Osten Europas. Berlin 2018.

催された展覧会「ガリツィア神話」のなかで、ガリツィアはポーランド、ウクライナ、オーストリアそしてユダヤという複数の視座から捉えられている。

19世紀後半以降、帝国領内でもナショナリズムが高揚し、1867年のオーストリアによるハンガリーとの「アウスグライヒ（妥協）」の結果、ガリツィアにも自治が認められた。それ以降、レンベルクの住民の八割近くをポーランド系が占めたように、町のポーランド化が進む。行政官庁の公用語にポーランド語が採用され、ポーランド系住民がドイツ系に代わって政治的主導権をもつようになった。他方、キーウに代わってウクライナの独立運動が展開され、その統一を牽引する政党も結成された。プロイセンのゲルマン化政策や、帝政ロシアにおけるウクライナ語出版を禁ずる1876年のエムス法発布によってウクライナのナショナリズムが弾圧されたのとは対照的に、オーストリア領ガリツィアではウクライナの民族運動にたいしては比較的寛容だったと言われている。ガリツィアは「ポーランドのピエモンテ」であるだけでなく³⁰⁾、ウクライナのピエモンテとして、文化的・政治的中心地となったのである。

ガリツィアのポーランド化が進んだ19世紀末以降、この地域のドイツ語文学も徐々に他言語にとって代わられていく。ドイツ語教育を受ける環境が限られていく状況下で、ドイツ語を表現手段として選ぶことのできた最後の世代と言えるのが、ロシアとの国境沿い町プロディ出身のユダヤ系作家ヨーゼフ・ロートである。ロートのテキストを手がかりに、戦間期リヴィウの描写について考察する。

30) Christof Schimsheimer: Galizien und die Kresy als polnische Erinnerungsorte im Vergleich. In: Magdalena Baran-Szołtys/Olena Dvoretzka/Nino Gude/Elisabeth Janik-Freis (Hg.): Galizien in Bewegung. Wahrnehmungen — Begegnungen — Verflechtungen. Miteinem Vorwort von Prof. Dr. Christoph Augustynowicz. Göttingen 2018, S. 37–55, hier S. 38.

3. 両大戦間期のウクライナ西部——ロート『ガリツィアへの旅』

西欧から失われつつある文化的遺産の担い手として、クンデラは「中央ヨーロッパの宿命が集約され、反映し、その象徴的イメージ」を見出したユダヤ人のひとりに、ヨーゼフ・ロートの名も挙げている³¹⁾。ロートが売れっ子ジャーナリストとなり、文学者としてその名が知られるようになるのは、第一次世界大戦後である。ロートもこの地方出身の作家と同様に故郷を離れ、ナチスが政権を掌握する直前の1933年1月末にパリに亡命するまで、レンベルク、ウィーン、ベルリンなど西欧社会を放浪しながら、精力的に執筆活動を行った。

ロートがジャーナリストとしてのキャリアを本格化させたのは、第一次世界大戦の混乱や窮乏に苦しむウィーンを離れたあとに向かったベルリンである。当時ベルリンは、人口増加によってニューヨーク、ロンドンに次ぐ大都市へと変貌していた。ジャーナリズムの中心地となりつつあったベルリンを起点として、ロートはフランクフルト新聞の特派員として、1920年代以降、ガリツィアをはじめソ連、アルバニア、ユーゴスラヴィア、ポーランド、イタリア、ドイツ、南仏等への取材旅行を重ねながら記事を発表していく。

なかでも文学者としてのロートにとって主要テーマとなるのが、第一次世界大戦によって解体されたハプスブルク帝国およびガリツィアという失われた故郷である。ロート作品を読むうえで、彼が約20年を過ごした言語や民族、国を分かち境界が希薄なガリツィアの風土を無視することはできない。

東方ユダヤ人家庭に生まれながら、西欧の同化ユダヤ人となるように、ロートが当初避けていた東方ユダヤ性という己のルーツにむき合う最初の契機となったのが、1924年のガリツィア旅行である³²⁾。ガリツィアという過去への

31) クンデラ, 71-72頁。

32) ガリツィア旅行で再発見された東方ユダヤというテーマが文学的に掘り下げられるのは、次作以降である。西欧社会へ移民し同化の運命をたどる東方ユダヤ人の運命につい

旅には、彼の自己探求という意味合いも含まれていたからである³³⁾。

3.1. 「虐げられ、忌み嫌われたヨーロッパの片隅」

1924年秋、ポーランド領となった旧ガリツィアへ鉄道で赴き、書き上げられた『ガリツィアへの旅 *Reise durch Galizien*』は、フランクフルト新聞に3回にわたって匿名で連載された³⁴⁾。この表題にはすでに、旅行をするジャーナリストの当地にたいする姿勢が表れている。ジャーナリストという職業的距離感を保とうとするかのように、ガリツィアが滞在の場所ではなく、列車で通り抜けていく通過点にすぎないことが、英語の *through* に相当する前置詞「～を通過して (*durch*)」の使用によって示唆されている³⁵⁾。ガリツィアは一見すると、近代の産物である列車の「コンパートメントの窓」(282)から覗き見られる好奇の対象のように位置付けられている。

しかしこうした旅するジャーナリストの職業的態度が、ガリツィアにかんする偏った見方に固執する西欧の読者とは異なっていることも明らかになる。以下は、連載一番目の記事『人々と地方 *Leute und Gegend*』(1924年11月20日付)の冒頭である。『放浪のユダヤ人』(1927)の冒頭と同様、西欧

で論じたエッセイ集『放浪のユダヤ人 *Juden auf Wanderschaft*』(1927)、つづく長編小説『ヨブ ある平凡な男のロマン *Hiob. Roman eines einfachen Mannes*』(1930)では、ロシアのヴォルギーニ地方に住む貧しい東方ユダヤ人一家のアメリカ移住が描かれている。

33) Vgl. Wilhelm von Sternburg: Joseph Roth. Eine Biographie. Köln 2009, S. 288; Joseph Roth: Reisen in die Ukraine und nach Russland. Herausgegeben und mit einem Nachwort von Jan Bürger. München 2015, S. 125. (ヤン・ビュルガー編『ヨーゼフ・ロート ウクライナ・ロシア紀行』(長谷川圭訳)日曜社, 2021年) ロートは過去だけでなく、同時代のソ連やウクライナ民族にも関心を寄せていた。

34) ロートの『ガリツィアへの旅』については下記の版を用い、本文中のカッコ内にページ数のみ記す。Joseph Roth: *Reise durch Galizien*. In: Ders.: *Werke*. 2. *Das journalistische Werk: 1924–1928*. Hrsg. v. Klaus Westermann. Köln 1990, S. 280–292.

35) Larissa Cybenko: *Das Galizien der Zwischenkriegszeit in den literarischen Reisebeschreibungen von Joseph Roth und Alfred Döblin*. In: *Der literarische Zaunkönig*. Hg. von Martin G. Petrowsky, Nr. 2., Wien 2013, S. 28–40, hier S. 30.

の読者の偏見を鋭く突く書き出しで始まる。

西欧においてこの地方の評判は悪い。文明化された傲慢さという月並みでいか
 がわしい冗談が、この地方を害虫、汚物、不真面目さと結びつけている。しか
 し、ヨーロッパの東方には西欧に比べて清潔さに欠けているという観察結果が
 かつて正しかったように、今ではその観察結果は陳腐なものとなっている。
 (281)

ここでは西欧と「東方」が対比されている。「害虫、汚物、不真面目」とい
 う否定的な現象そのものを認めながらしかし³⁶⁾、西欧の「文明化された傲慢
 さ」が生み出す「月並みな」ものの見方が批判されている。西欧側の長年アッ
 プデートされていない、客観性を装った「観察結果」の陳腐さにたいする皮
 肉も述べられている。この地方の「独自性」(281)を捉え損なう恐れのある
 西欧の見方と対照をなすように、この地域を記述する匿名の旅するジャーナ
 リストの野心もまた認められる³⁷⁾。

そもそもこの紀行文の目的は何か。1924年当時すでにガリツィアという
 名は消滅し、この地域はポーランド領に帰属している。それにもかかわらず
 表題に「ガリツィア」という名称が用いられることによって、新国家体制の
 ポーランドは背景に退き、フランツ・ヨーゼフ一世統治下のハプスブルク時
 代が喚起される³⁸⁾。この旅は、たんに列車による空間移動を意味するもので

36) Krsztof Lipiński: Die „fremde“ Heimat. Polen in den Reiseberichten Joseph Roths. In:
 Ders.: Auf der Suche nach Kakanien. Literarische Streifzüge durch eine versunkene Welt,
 St. Ingbert 2000, S. 103-114, hier S. 106.

37) ロートはユダヤ系であることを隠蔽すべく、長い間自分の出生地や家族構成、来歴な
 どを詐称していた。平田達治『放浪のユダヤ人作家ヨーゼフ・ロート』鳥影社、2013年、
 88頁参照。本紀行文のなかでも、旅するジャーナリストのロートがガリツィア出身の
 東方ユダヤ人という出自については一切言及されず、素性はほとんど明かされない。「わ
 たしはこの街へ二度勝者のひとりとしてやって来たことがある」(286)と第一次世界大
 戦時にこの地に赴いたことのある経験者として自らを提示するのみである。西欧の陳腐
 な見方を覆そうとする態度を見せながら、ガリツィアにたいする彼の態度はアンビヴァ
 レントであると言える。

38) Lipiński S. 105.

はなく、過去にまで遡る旅でもあるのだ。

帝国の周縁に位置していたガリツィアにあって、「一日一本の列車」は「世界との唯一の結びつき」だった。(283) 事実、1861年には鉄道が敷設されたことによって、「虐げられ、忌み嫌われたヨーロッパの片隅」(284)であるガリツィアも帝国に包摂されていった。以下の引用では、両大戦間期にあってもなお、この地域とヨーロッパ世界との変わらぬ関係性が強調されている。

工場はない、宣伝広告はない、ロシア人はいない。市場では、200年前のヨーロッパであるかのように、木製の原始的な操り人形が売られている。ここでヨーロッパは途絶えてしまったのか。//いや、それは途絶えていなかった。ヨーロッパと、この言ってみれば追放されてしまった地方との関係は変わらず活発である。本屋でわたしはイギリスやフランスの最新の文学の新刊書を目にした。文化の風はポーランドの大地まで種を運ぶ。フランスとの結びつきがもっとも強い。死んでしまった空間に横たわるドイツを経由して、ごく少量がここに飛んできて戻っていく。(284f.)

「200年前のヨーロッパ」のままと呼ばれるガリツィアの前近代性は否定できない。しかしながら旅するジャーナリストはこの地域で結実するかもしれない「種」を運ぶ西欧からの「文化の風」を感知するように、「虐げられ、忌み嫌われた」この地域のヨーロッパへの帰属が強調されている。

本記事を結ぶ次の一節でも、ガリツィアが他の世界から見捨てられていながら、遮断されていないという両義的な関係性について反復するように述べられている。

ガリツィアは世界に見捨てられた孤独のうちでありながら、しかしそれでもなお孤立はしていない。追放されているが、遮断はされていない。ガリツィアには欠陥のある下水網から推測されるよりも多くの文化があり、無秩序も数多くがあり、それ以上に風変わりなもの (Seltsamkeit) が数多くある。多くの人はそれ〔ガリツィア〕について戦争の時代から知っているが、その表情というものはそのときは隠されていた。それは一地域というものではなかった。それは

後方基地であり前線だった。しかしそれには固有の欲求、固有の歌、固有の人々と固有の輝きがあった。侮辱された者たちが浮かべる悲しげな輝きがあったのだ。(285)

西欧よりも後進的な側面（「欠陥のある下水網」「無秩序」）を認めつつ、他にはないこの地域固有の「文化」や「風変わりなもの」が目すべきものとして上位に置かれている。しかし一般的に、ガリツィアは「戦争の時代」から「後方基地であり前線」として知られている程度にすぎない。そのためこの旅するジャーナリストは「固有の」という形容詞を反復して用いることによって、戦争のみに還元されることのできない当地の様々な「表情」を強調する。

本記事の冒頭部ではすでに、「前線」としてのガリツィアの側面について述べられていた。

ガリツィアというあの大战の一番の戦場は、なおも長い間回復していない。戦場を栄誉とみなした人たちにとってもそうである。ガリツィアの大地で西欧の人の身体が斃れ、それが肥料になるにもかかわらず。撃たれて傷を負ったティロールの人たち、低地オーストリアや帝国のドイツ兵たちの腐った四肢から、この地方のとうもろこしが育っているにもかかわらず。(281)

東部戦線の主戦場であったガリツィアという語自体、戦争の途方もない悲惨さを示す同義語にひとしい。遮るもののない広大な空間において、とうもろこし畑と墓場は、渾然一体をなしている。大地は、戦争犠牲者の身体を肥料とし、命を育む。大地の豊穡さと対照をなすのが、人々の貧困である。「生きていくのは厳しい。ガリツィアには800万人もの人を養わねばならない。大地は豊かであり、住民は貧しい」(281)。ガリツィアは死と生が密接に結びついた場所である。こうした側面は、次節で扱う三番目の記事でも詳述される。

3.2. 生と死の狭間の光景

ロートの紀行文は、旅行ガイドブックとは趣きを異とする。「通り、広場、教会、町並み、正面玄関、駐車場、家族の様子、建築様式、住民グループ、館長、記念碑など」にかんする客観的な「説明」(285)が記述されることもない。観光名所への言及もないロートの紀行文のなかで、固有名は出されないものの、現在リヴィウの名所として知られるリチャキフ墓地と推察される場所が、『身体障害者たち ポーランドの傷痍兵の葬列 *Die Krüppel. Ein polnischen Invalidenbegräbnis*』(11月23日付)では描出されている。

墓地にむかう葬列をなす、「人間を人間たらしめている特徴がなくなっている」(290)人たちは、こう具体的に列挙される。「この町のすべての傷痍兵たち、五体不満足でない者たち、人の形をかつては成していた者たちだった。足を引きずる人、目の見えない人、腕や足のない人、麻痺した人、震える人、顔を失った人、背中が曲がった人、腺病を患っている人、恋煩いの人、白痴になった人、口のきけなくなった人、記憶をなくして自分が誰だかわからない人、まだ名前がない病にかかった人、英雄的行為の末に身体を壊してしまった人たちである」。(289)彼らからなる「グロテスクな隊列」(290)の様子は、以下のように描写されている。

霊柩車の後ろには数千人の身体障害者たちを見た。彼らがかつて軍隊で隊列を組んで行進したように、二列になって彼らは前に向かって動いていた。まず200人くらいの手足が不随になってしまった者たちが不自由な足を引きずって歩いていた。それは悲惨な行列だった。歪んだ軍国主義の姿であり、グロテスクな隊列だった。兵士が鳴らす一定の健全なリズムではなく、でこぼこに舗装された道のうえを松葉杖が不規則に奏でる木と石の音や、合の手を入れるように義肢の関節がきしむ音が聞こえた。病人の喉からは、うめき声やぶつぶつ言う音、咳払いする音やピューピューという音がしている。(290)

ここでは、葬列の様子が拡大鏡を通して見たかのように、聴覚表現を交えてつぶさに描出される。いわば生と死の狭間にある「歩く廢墟」や「動く瓦礫」

「のたうつ残骸」（290）と呼ばれる葬列と対照をなすのが、「足を止めてじっと動かずに葬列を眺めていた」人々（291）だろう。しかしこの「人々」についてこれ以上の記述はない。彼らは、そのまなごしの先にある「全世界の戦争負傷者の代表者」、「国際的な戦争被災民族」（290）とは異なる世界の住人だろうか。距離をとってガリツィアを傍観する西欧の姿が描き込まれているのかもしれない。

最後に、民族と言語の錯綜する境界領域としてのガリツィアの町レンベルクの描写について考察する。

3.3. 「境界線が曖昧になった町」あるいは「民族的言語的な多様性」

後進性に特徴づけられるガリツィアで唯一町と呼ぶに値するのがレンベルクである。(286) 1900年頃のレンベルクは、約20万人を擁する、ウィーン、ブダペスト、プラハ、トリエステに次ぐ規模の町だった³⁹⁾。電灯や電話が導入され、市電が走り、帝国領内で最新の駅舎が建設されるなど、レンベルクには近代的な側面も認められる。

紀行文の二番目に置かれた記事『レンベルク *Lemberg, die Stadt*』（同年11月22日付）でも、一番目のものと同様、この町に長らく残る戦争の痕跡について言及される。

ここでは戦争が荒れ狂い、ここではそれに付随する現象のほうが悪い。戦争よりも長引くからだ。帝国崩壊後この町をめぐってはポーランド人とルテニア人〔ウクライナ人〕が戦い、ここでは十一月ポグロムが起こった。そして今日もなおレンベルクは兵站基地のようなものである。(287)

39) Lutz C. Klevevan: *Lemberg. Die vergessene Mitte Europas*. Berlin 2017, S. 30; 1914年頃のポーランド化の進んだレンベルクの民族構成は以下の通りである。85パーセントがポーランド系、11パーセントがルテニア系（ウクライナ系）、3パーセントがドイツ系、その他少数民族からなる。なおユダヤ系住民は民族として数えられていないため、上記のいずれかに含まれる。Lipiński, S. 109.

戦間期には、レンベルクをめぐるポーランド系住民とウクライナ系住民とが衝突した。前述のレチャキフ墓地には、その犠牲者が埋葬されている。「ここ」という場所を表す語の反復によって、同一の場所で繰り返し戦争が起きていることが強調されている。西欧の読者も遠方から傍観するのではなく、否応なくレンベルクに身を置くことが求められているかのようなのである。また、テキストは過去時制で書かれたのち現在時制に切り替わり、順接の接続詞「そして」と「今日」という語によって、「戦争が荒れ狂っていた」レンベルクの過去と「兵站基地」としての現在とが密接に結びつけられている。

他方で、過去と現在とを明確に区別して記されるのが、ポーランド領となった町の変化である。「かつて目ぬき通りは、支配者への忠誠を示すために『カール・ルートヴィヒ通』という名だったが、今は『義勇通』と呼ばれている。〔…〕これまでずっとドイツ語とポーランド語とルテニア語が聞こえていたが、今はポーランド語、ドイツ語、ルテニア語が聞こえる。通りの終わりにある劇場近くではイディッシュ語が話されている」と。(287)

さらにこのような「言語的な多様性」に抵抗するものとして挙げられる、「歴史的発展を通じて力をつけ、ある程度認められてきたポーランドの民族意識」については、こう述べられている。

若くて小さな民族は敏感である。時に大きな民族もそうである。民族的言語的な統一は強みでありうるが、民族的言語的な多様性 (Vielfältigkeit) はつねにそうである。この意味においてレンベルクはポーランドの国を豊かにするものである。多様化がまだ長い間始まっていないヨーロッパの東方において、レンベルクは多彩な場所である。この町は、赤と白、青と黄、少数の黒と黄色からなる多彩な場所である。(ebd.)

「民族的言語的な統一」と呼ばれる国民国家的「強み」の可能性自体は否定されていないが、町を「豊かにするもの」として「民族的言語的な多様性」のほうが上位に置かれている。この町は、ドイツ語称レンベルクをはじめ、ウクライナ語称リヴィウ (Lviv)、ポーランド語称ルヴフ (Lwów)、ロシア

語称リヴォフ (Lwow), イディッシュ語称レンベリク (Lemberik) など多言語で言い表されるが、いずれの語も同一の町を指しながら、その意味合いは異なるものであり、互換可能なものではない。

レンベルクの「多彩な場所」としての側面は、町の住民が総出で参加する「恒例の花馬車行列 (Korso)」の賑わいになぞらえられて描写される。

男たちの衣装は、飾り気はないが当然のことであるかのように優雅なもので、若い女性たちは燕のように目的地をめざして軽やかな優美さで飛んでいく。明るく表情をした物乞いは上品に施しをわたしに求めてきた、わたしを煩わせなければならぬのが申し訳ないと言いながら。ロシア語、ポーランド語、ルーマニア語、ドイツ語そしてイディッシュ語が聞こえてくる。それはまるで大きな世界の小さな支店 (eine kleine Filiale der großen Welt) のようだった。しかしこの町には博物館も劇場も新聞もない。しかしその代わりに、ヨーロッパの知識人、作家、宗教家、あるいは神秘家、ラビ、商人などを送り出した「タルムード・トーラ学校」の一つがある。(286)

ここでは、住民の快活さや町の祝祭的な気分も伝わってくる。レンベルクがポーランド領ルヴフに帰属を変更してもなお、言語的な多様性というこの町の特異性は健在であり、ユダヤ文化の担い手としての側面も確認されている。

旅するジャーナリストであるロートは、この町を「大きな世界の小さな支店」だと呼び、この町のヨーロッパ的性格を表現したように、クンデラもまた中央ヨーロッパのうちにヨーロッパの姿を見出していた。「中央ヨーロッパはヨーロッパの縮図、その変化に富んだ豊かさの縮図になろうと望んできたのだ。いわば原ヨーロッパ的な小ヨーロッパ、『最小限の空間に最大の多様性』という原則にのっとった、諸民族のヨーロッパの縮小型になろうとしたのである」と⁴⁰⁾。ロートの紀行文では、ポーランド領に帰属が変更されてもなお、ハプスブルク時代以降失われずにある、「最小限の空間に最大限の多様性」をもつ小ヨーロッパ的な性格が再確認されている。

40) クンデラ、66頁。

1920年代前半のポーランド領ルヴフは、「法則に違反する」(288)ことを最大原則とする、古くからの「オーストリア的怠慢さ(österreichische Schlendrian)」を受け継いだ町であるという。本記事を結ぶ以下の引用では、この町のなかの様々な境界線の在り方や帝都との関係性が述べられている。

「ローマ」という文学喫茶がある。上流市民はここを訪れる。ここでもまた、古くから根付いているものとボヘミアンなものとの境界が曖昧である。[…]あらゆる境界線もほとんど見えないくらい弱くチョークで引かれている。境界線が曖昧になった町(die Stadt der verwischten Grenzen)なのだ。かつての帝国の最東端である。レンベルクを越えればロシアというまた別の世界が始まる。もっと西にあるクラクフのほうがオーストリアっぽくはない。レンベルクはずっと民族の博物館のままである。ウィーンとレンベルクのあいだには、今日もなお変わらずにラジオの文化交流がある。(289)

ここで小ヨーロッパ的レンベルクは、より小さな空間としての喫茶店、さらには店内の様子になぞらえられて描写されている。言語や民族だけでなく、社会的帰属や、新しいものと古いものなどのあらゆる境界線は、この空間にあって「弱くチョーク」で引かれた「曖昧な」ものにすぎず、無にひとしい。クンデラが「ヨーロッパ」を地理的概念としては捉えなかったように、ここでもまた、西欧にたいしては開かれながらも、別世界にたいする防壁の役割を担うレンベルクの政治的・文化的な位置づけが再確認されている。西欧世界に開かれている証として、帝都ウィーンと「最東端」のレンベルクとの「文化交流」という結びつきも示されている。

ロートが旅した1920年代前半においては、そこに暮らす人々や町の雰囲気の中にヨーロッパ的な多様性を見出すことはまだかろうじて容易かったのだろう。様々な民族が混在したレンベルクという「民族の博物館」としての性格が完全に失われてしまうのは、第二次世界大戦後のことである。ロートの『ガリツィアへの旅』において、両大戦間期のウクライナ西部のリヴィウは、民族同士の緊張関係を孕みながら、同時に、二項対立的なものを見方

を超える多様性が健在していたヨーロッパの町として描出されている。

Lemberg in der Westukraine in der Zwischenkriegszeit:

Spurensuche nach der Habsburgerzeit in Joseph Roths *Reise
durch Galizien*

Yoko Aso

Die russische Invasion der Ukraine hat die Frage nach der ukrainischen Zugehörigkeit aufgeworfen. Auf der Suche nach einer anderen Identität als der russischen hat die Ukraine mehrheitlich beschlossen, sich auf ihre historische Vergangenheit zu beziehen, insbesondere auf die Zeit, als die Westukraine als Galizien Teil der westeuropäischen Gesellschaft war.

Die Bestätigung der Dichotomie zwischen Russland und der Ukraine, zwischen Ost und West, lässt die Realität der Region als Grenzregion in Vergessenheit geraten, die ursprünglich für das Durcheinander der nationalen, sprachlichen und religiösen Grenzen steht. Der nationalstaatliche Rahmen als ein modernes westeuropäisches Wertesystem kann offensichtlich nicht auf Grenzregionen wie Galizien oder die Ukraine angewendet werden.

Die vorliegende Arbeit beschäftigt sich mit der *Reise durch Galizien* (1924) des deutsch-jüdischen Schriftstellers Joseph Roth (1894–1939) über seinen Besuch im polnischen Galizien in der Zwischenkriegszeit. In seinem Text wird Galizien, das in Westeuropa damals einen negativen Ruf von Rückständigkeit und Armut hatte, als „mißhandelte und verpönte europäische Ecke“, aber auch als eine Region mit europäischen Verbindungen dargestellt.

Während in der Zwischenkriegszeit der polnische Nationalismus erstarkt, wird Galizien in Roths Buch als eine Region hervorgehoben,

in der die nationale und sprachliche Vielfaltigkeit stärker ist als die nationale und sprachliche Einheitlichkeit. Die Vielfaltigkeit verkörpert sich unter anderem in Lemberg, der damaligen Hauptstadt Galiziens, als „eine kleine Filiale der großen Welt“. In diesem Sinne lässt sich sagen, dass Lemberg auch für den Osten Europas eine Bereicherung jenseits der dichotomen Sichtweise ist.

Das tragische Schicksal Galiziens, so der österreichische Schriftsteller Martin Pollack, habe viel Gemeinsamkeit mit dem 1983 veröffentlichten Essay des tschechischen Exilautors Milan Kundera (1929–2023) *Die Tragödie Mitteleuropas*. In Anlehnung an Kunderas Mitteleuropa-Diskurs wird in der vorliegenden Arbeit das galizische bzw. polnische Lemberg der 1920er Jahre beschrieben. Dabei wird deutlich, dass das habsburgische Galizien als europäische Region für die westlich orientierte Identität der Ukraine eine nicht zu unterschätzende Rolle spielt.